

日曜聖書講筵 聖霊降臨節 (京都キリスト召団)

愛

——ヨハネの第一の手紙 第1〜3章 (口語訳)——

2026年5月24日

奥田昌道

開会の祈り 「ありがとうございます」だけ 十字架における絶対愛 愛のプレゼントをいただきたい
ているだけ 「義と愛」がワンセット 十字架の贖い 我々を天国人にするため 「あなたは何人
にキリストを伝えましたか？」と天国で訊かれる ヨハネの第一の手紙第1章 第2章 聖霊を
いただいている 第3章 他者のために生命をすてる愛 互いをキリストの心で愛し合う 聖霊
という霊を下さる

●開会の祈り

今朝もこのように、主にある兄弟姉妹方をこの祈りの家にお招きくださいます、喜々
として皆さん集まってくださいました。

どうぞ、今日の集会を、御霊の主さまがこの場にご臨在くださって、既に天に召されて
天界から我々を見守ってくれている愛する兄弟姉妹方、また各地の兄弟姉妹方と共に御名
を讃え、御名に感謝し、そしてまた新しい生命をしっかりと受けとっていくことができま
すように、どうぞ、おん導き、お願い申し上げます。

また、事情があつて、ここに集うことができなかった兄弟姉妹方をも、どうぞ、その場
において同じ祝福の中に包み込んでくださるようお願い申し上げます。

この願いと讃美を尊い主イエス・キリストの御名をとおして御前にお捧げ申し上げます。
アーメン！

●「ありがとうございます」だけ

はい、ありがとうございます。本当に素晴らしいお天気を賜りました。いつも思うんで
すけれども、同じ集会をしますにしても、町の真ん中のビルディングの一室でやるのでな
くて、こういう大自然の素晴らしい環境の中で、このようにして皆様方と一緒に集会を持
つことができるということだけでも、本当に私は有り難いことだと、

「有ることが難しい」

という、「ありがたい」という思いであります。そしてまた同時に、

「ここまでお導きくださった、おん護りくださった御霊の主イエス・キリストさま、
本当にありがとうございます」

という思いでいっぱいです。皆さんはいかがでしょう。



「あれしてくれ、これしてくれ」
ではなくて、

「本当にありがとうございます、ありがとうございます」

という、私の場合はそっちの方が多いんですよ。一応、独り暮らしではありますがありますけれども、いろんな方のご好意によつて、本当に「何不自由なく」といえるような生活をさせていただいておりますので。そして、日曜ごとにはこうして皆様と一緒に御名を讃えることができる。そして天界から、既に召された者たちも応援してくれている。天国とはどういう所か？
「こういう所だ」

と、そう言いたいと思っております。だから、いつも先ずは感謝で始める。讃美で始める。感謝、讃美、祈り、そういう中で時を過ごすことができる。それが私たちが賜っている恵みの特権だと思っています。

●十字架における絶対愛

聖日集会の講筵のタイトルですけれども、私のメモによりますと、今年の5月3日には、
筵題は

「福音の原点に立ち帰る」——ヨハネ伝第3章、ヨハネ第一書第3章——

そして次のようにメモしております。

「神の愛は、

つまり「愛」というのは、聖書に「神」と同じぐらいに出てくる大事な概念、中身ですね。

主イエス・キリストの十字架における絶対愛において表れている。」

この、

「絶対愛」

という言葉は、「絶対」の「対」は相手ということでしょう。だから、「絶対」ということは相手を超越している。つまり、相手は誰か？我々ですよ。我々がどういう姿であろうと、そういうことにかかわらず超越して、愛しぬいてくださる。それが十字架で表れた。単に言葉で仰ただけではない。ご自分が十字架にかかって、私たちと神・キリストとの間に妨げているいろんな妨げを全部、十字架で取っ払ってくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

というお言葉がありますね。道、天国への道、根元的には神さまの愛のところへ到達する道。神さまの世界は、

「天」

です。それは根元的な世界です。聖書によれば、

「神は言^{ことば}でこの地上のこういった現実世界をお創りになった」

ということになっています。そして、主の祈りは、この世の世界において神さまの愛が充



満するように、

「天において御意が成^{みこころ}っているように、地においても同じように御意が成りますように」

ということを祈ってくれている。

ところが、その祈りは、現実はそのよりも、人間があまりにも悪すぎた。エゴイストで、「神さま」と言っただけで、自分を大事にしてくれるから信じる。自分を大事にしてくれない神さまなんかは蹴飛ばす。つまり、自己中心です。

「自己中心が罪」

なんです。

キリストというお方は神さま、中心です。孝行息子なんです。神さまの御意を貫く、これが「義」なんです。「義」というのは、御意が貫かれているすがたを「義」といいます。「愛」というのは、抱き抱かれているという一つにされている世界。その義の使命的なすがたと、それから、抱き抱かれるという愛のすがた。

「義と愛」

がイエスさまの場合には渾然^{こんぜん}と一つになっている。御意はそうやって天において義と愛が一つになっている。

「そのように地においても」

と祈ってくださいている。

ところが、地はなかなかそうはいかん。エゴイストで何でも自己中心で、自分のためには人を蹴飛ばしてもという競争社会です。そういうエゴの、つまり自己中心的な、そういう現実世界に、

「御意が貫かれますように」

と。それは簡単ではない。どうしたらいいか。

「お前が十字架でそういう御意を貫くことを妨げているエゴ、自己中心、それを全部解決してやれ」

と。それにはキリスト自身が神さまから蹴飛ばされて、地獄に突き落とされる犠牲を払わなければならなかった。

「わが神、わが神、なんぞ私を捨て給いし」

と、叫ぶざるをえなかった。だから、人の罪をわが罪として審判^{さばき}を受けてくださった。そのまま、イエスさまは地獄へ行き放しだったら、我々は救われようがなかった。

ところが、光輝く姿で甦^{よみがえ}られてくださった。これが、

「復活」

といわれている事態です。しかもそれは、地獄で苦しんでいる者たちを抱き上げて、そして甦^{よみがえ}られてくださる。ただでは起き上がらない。我々は地上で転^{ころ}んだら、転^{ころ}んだ代りに何か



いいものが落ちてないか捜して、それを捕まえて、「これで元がとれた」と思うけれどもキリストの場合は、「元をとる」というのは、地獄で苦しんでいる者たちを救い上げて甦らせてくださった。

それはどこまでも愛なんです。聖書の基本的な一つ概念といふかな、言葉は「愛」でしょ。

「神は愛なり」

という。今日のタイトルは「愛」ということになっていますけれども。「神」という言葉と同じくらい、「愛」という言葉が聖書には、特に新約聖書には表れています。その愛を、言葉ではなくて、現実化してくださったのがイエスというお方ですね。そういうふうに私は思っています。

●愛のプレゼントをいただいているだけ

5月3日の筵題のメモを持ってきた。「福音の原点に立ち帰る」というタイトルで、副題としてヨハネ伝第3章、それからヨハネ第一の書。次のようなメモを添えています。

「神の愛は、主イエス・キリストの十字架における絶対愛において表れている。その愛を受けとるか受けとらないかは各人の自由であるが、それを有り難く受けとることを信仰という。信仰による義、信仰によって義とされる、とはこのことをいう。」

だから、「信仰」というのは、

「何かを無茶苦茶、信じている」

というのではなくて、そんな主観的なこつち側の勝手な思いではなくて、

「愛を、ありがとうございますと受けとっている姿」

これは「信仰」なんて思っていないですよ。

「プレゼントをいただいているだけ」

ですから。ところが、第三者から見たら、

「あつ、あの人は神さまを信じている。あの人は信仰がある」

と言う。皆さんもそうでしょ、「信仰」なんて思わない。恵みの中にいるんだもの。赤ちゃんがお母さんに抱かれてスヤスヤ眠っている。我々はそういう主の幼な子でありたい。それは、「私がどうこう」ではない。神さまの方が抱きしめて離さない。

聖書だけ見てたら、特に旧約なんか見たら、神さまは恐いですよ。何かしたら罰せられる。

「贖いの供物を献げないといかん」

とか、そういうすごく犠牲を要する。それは人間が悪いものだから。

けれども、今は犠牲は要らない。何でか？ イエス・キリストがご自身を犠牲として献げてくださったから。そういうキリストの尊い犠牲がある。それを

「ありがとうございます」

と言って受けとっているのが、本当のクリスチャンです。本人は「信仰」なんて思ってい



ない。キリストにおいてやってくださった神のみわざ。あるいは、キリストが自分を献げて、我々を救い上げてくださった。そういう事態を、「ありがとうございます」といつて受けてっている。「信仰」とは思っていない。

「プレゼントだよ」

「はい、ありがとうございます」

と。これを他人が見たら、

「あつ、あの人は信仰深い人だ」

と、勝手に言っているだけです。

皆さん、「信仰」だと思っていますか？ 親子の関係で、

「私は親父を信じている。親父は私を信じている」

とか——ま、そういうこともあるかも知れませんが——本当の関係というのは、「信仰」とか何とか、そんなことは思わない。多分、イエスというお方は神さまの懐に抱かれて、「信仰」なんて思っておられなかったと思うんですよ。だから、

「私を見た者は父を見たのである」

と。イエスはピリポに、

「父を示して欲しいと何で言うのか。私は父と一緒にいるではないか。私を見た者は父を見たのだ。私は父の中に、父は私の中に。一つである」

と言われた。

●「義と愛」がワンセット

「御意が貫かれますように」

というのは「義」の関係です。自分がどうこうではなくて、

「あなたの御意が私をとおしてこの地に現実化してください」

と言って、自分を献げ切っている姿、これが「義」です。

それから「愛」は、赤ちゃんがお母さんに抱かれて、おっぱいを飲んでスヤスヤ眠っている。これは一つですね、お母さんと赤ちゃんは。そういうふうに、抱き抱かれる関係、これが「愛」です。

イエスという方は、一方では「僕」として、

「御意が天において成っているように、地にも私を通して成らしめてください」

と、自分を献げ切っておられる、これが「義」の姿です。それから、抱き抱かれる、

「私を見たものは父を見たのである。私が父の中にいるのが分からないのか」

と、ピリポに仰っておられます。

そういうふうに、イエスというお方においては、「主と僕」という「義」の関係と、「父と子」という「愛」の関係、これがまたワンセットなんです。そういう姿に我々をしてあげよう



というのが、イエスにおいて表れた神の愛^{おほ}というか、その神の思し召しをそのまま実現してくださったのがイエス・キリストです。

イエスの場合には、何の犠牲も払わないで神さまと一如の姿です。ところが、我々の場合には、いくら神さまの方でそれを望んでくださっても、我々のエゴというやつが邪魔して、その姿になれない。ですから、どうしたら、ちょうどイエスが父なる神さまと義の姿、愛の姿の渾然^{こんぜん}一体となっている、同じ姿になれるだろうか。ゲッセマネで苦しまれた。我々のそういうエゴというかな、

「神さまを信じる」

といったって、自分の幸せになりたいために信じる。神さまのために神さまを大事にするのではなくて、

「私を幸せにしてくれるから信じる。そうでなかったら、信じる必要なんかないじゃないか」

と。これがいわゆる世間一般の信仰という事態です。

経済の方でいえば、何かいろんな投資をすれば、それだけ回収してもっと儲かるという。ま、いうならば、

「信仰というのは自分を幸せにするため、家族の幸せのために信仰する。それでなかった意味がない」

という、どこまでも自己中心なんです。

キリストの場合にはそうではなくて、

「御意が天において成っているように、地にも成りますように。あなたと私は本当に一つでありますように」

という、義の関係と愛の関係が一つであるように、そういう姿でイエスはおられたけれども。そのように天の事態が地上で成るかといったら、成らない。ではどうしたらいいか。それは十字架だった。つまり、我々の背きというかな、

「御意が天において成っているように、私をとおして地にも成ってください」

と、自分を献げ切っていない。

「私を幸せにしてくれるなら、信じまっせ。それでなかったら要りませんよ」

というんでしょ。そして、何か変なことがあったら、

「神も仏もあるものか!」

と。すべて自己中心、エゴイストです。

そういう根元的なエゴ、それを取り除いてくださったのが十字架ですよ。キリスト自身は十字架にかかる必要なんか全くない。にもかかわらず、我々を本当に天国人、神の子にするためにキリストが、我々と神さまの間を妨げているエゴイズム、不信仰を全部、十字架で片付けてくださった。



イエスは福音書の中で、ゲッセマネの祈りでものすごく苦しまれたでしょ。

「**滴り落ちる汗は血の滴のようであった。天使が来てイエスを励ました**」

ということが書いてある。何であのお方がそこまで苦しまなければならなかったのか。ご自分には全く理由がなかったんですよ。私からみたら、キリストほど孝行息子はいなかったと思う。自分よりも神さまが第一です。

「**御意が天において成っているように地においても成りますように**」

と自分を献げ切っておられる。それから、信じ切つて、赤ちゃんがお母さんに抱かれてスヤスヤ眠っているように、懷の中におられる。

「**私を見たものは父を見たのである**」

と。そして、

「**我は道なり、真理なり、生命なり**」

というは、ご自分が道であり、真理であり、生命であるだけでなく、「道なり」というのは天国への道、神さまのところへ行く道です。

「**我は道なり、真理なり、生命なり。我によらずば、誰にても父の御許に至る**

ことあたわず」

と仰っているでしょ。キリストが父の懷に抱かれて一つである。そのキリストにおいては「僕」としては、

「主の御意が貫いて私をとおして実現しますように」

と献げ切っておられる。それから、「父と子」という愛の関係では——いや、「父と子」という言葉は、私は好きでなかった。あまり親父との間が——「母と子」は良かったけれども、なかなか「父と子」というのはピンとこなかったけれど——キリストの場合には本当に「父と子」という関係で抱き抱かれる関係。そして「主と僕」というので、御意が貫かれる関係。つまり「義と愛」がキリストにおいては一つである。

●十字架の贖い

そういう姿に私たちも在らせたい。しかし、我々の側のエゴというやつがそれを邪魔している。それを取り除くにはどうしたらいいか。

イエスはいろいろな奇蹟をなさいましたよ、福音書を見たら。けれども、十字架にかかって、

「我々の背きの姿、不信仰の姿、エゴイスチックな姿、それを根元から新しく創り

変えるのは十字架の贖い、しかない」

という、そこに到達されたと思う。だから、あのゲッセマネで祈っておられる時に、

「**滴り落ちる汗は血の滴のようであった。天使が来てキリストをなだめた**」

とある。それはそうですよ。今まで神さまに背いたことがないでしょ、イエスは。

そして、繰り返し申しますように、イエスにおいては、「主と僕」という義の関係と、「父



と子」という愛の関係、これが渾然^{こんぜん}一体となっている。これは天国の事態です。それをイエスは引き裂かれて、あのように苦しまれて、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

と叫ばなければならなかった。それは全部、我々を救い上げ、我々を本当の神の子、天国人にするために払ってくださった尊い犠牲だった。それを知らされた、それを伝えるのが伝道ということです。

「福音」というのは、そういう神さまの側で我々を本当に神の子という現実へと、霊的な現実へと我々を転換させるために、神さまの方で何をしてくださったかという、そういうことです。それがイエス・キリストが尊い犠牲を払ってくださったということになるわけです。そういう十字架において、本来なら我々が受けとるべき十字架という事態を、イエス・キリストが代りに受けとってくださいました。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

という。小池先生は、

「それはキリストの神さまに対するプロテストだ。これほどまでにあなた一筋で貫いた私、これほどまでに人々を愛して——それも御意だからそれを貫いた——こういう私を棄てて、あなたの義が成り立つんですか」

という、ま、言うならば、イエスという方の、

「無茶苦茶ではないですか。それが神さまの義なんですか」

と。義というのは、もつとまっとうなものであるわけですよ。罪びとが罰せられる。罪びとが地獄へ行く。これが当たり前です。でも、イエスほどに神さま一筋——「主と僕」という関係、「父と子」という関係がもうワンセットになっている——そういう存在がこのように地獄に突き落とされる。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

「あなたの義というものはそんなものなのですか。抱き抱かれる関係が、愛が引き裂かれるのではないですか」

と。そういう「激しいプロテストだ」ということを小池先生は仰っていました。

つまり、神さまも辛かったんですよ。あんな孝行息子を蹴飛ばして地獄へ突き落とす、そんなことを喜ぶ親がどこにおるか。でも、そうするしかなかった。我々の罪を赦して、自己中心の我々を本当の神の子にするにはそれしかなかった。

何か北森さんという神学者が「神の痛みの神学」ということを仰ったようですね。それに対して、小池先生は、

「痛みどころではない。砕けだ」

と言われた。

「砕け」



という言葉を非常に先生は愛用された。つまり、自己犠牲ということをもよく表しているのではないでしょうかね、「砕け」というのは。

我々クリスチャンというものは何かというと、そういう神さまがキリストにおいてなしてくださった事態。キリストの方からいうと、キリストが神さまの御意にしたがつて、自分を十字架に献げ切ってくださいました事態。

それは誰のためなのか。我々は自分で自分をどうしようもない、そういう我々に代わって、キリストがいれば犠牲の、神の審判を受けとってくださいました。棄てられていいはずがないの方が棄てられている。それが、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし。これほどまでにあなた一筋で生きてきた、義の姿、愛の姿、そういう私が地獄へ蹴飛ばされて行く。いったい神さま、あなたの義は何なのか」

と。そういう激しい「キリストのプロテストだ」と、小池先生は仰った。だから今度は、神さまの方からは、

「すまん。お前みたいな孝行息子、お前みたいな、私の思いを完全に実現してくれただけをこうやって蹴飛ばして地獄へ突き落とす。そんな親がどこにおるか。しかし、それをせざるをえなかったんだ。すまん」

という、神さまも辛い。

●我々を天国にするため

それは何のためか。天国人になれない我々を天国人にするために。「永遠の生命」というのは、天国人にされている人の姿ではないですかね。それが福音書では、

「神は独子を賜ったほどに世を愛してくださいました。彼を信ずる者がひとりも滅びないで永遠の生命を得るためである」

と、ヨハネ伝の3章16節に出てくるでしょ。なにか「永遠的に何かをやったよ」という言葉で仰っているのではなくて、現実によイエスというあの孝行息子があれだけの尊い犠牲を払っている。そういう事態に気づいて、

「ありがとうございます」

と。私はもう「ありがとうございます」としか言う言葉はないんですよ。

しかも、そうやってくださったことに「ありがとうございます」と受けとることを、神さまの側は願っておられるわけです。神さまの側でそれだけの犠牲を払っておられるのに、知らん顔していたら、どれだけ神さまは辛い、キリストもどれだけ辛い。そう思われませんか？ クリスチャンというのは、何かを無理やり信じているのではないですよ。

「神さまがイエス・キリストにおいてしてくださいましたのは、あなたのためだった」

「そうでしたか。わかりました。ありがとうございます」



と。差し出された救いの御業を「ありがとうございます」といって、素直に受けとる。それだけなんです。「信仰」なんて思わない。「信仰」というのは何か無理やり信じている事態でしょ。そうではなくて、

「お前のためにこんな事を神さまはしてくださった。キリストはしてくださった。それほどまでにお前を愛しておられるんだ」

「あつ、そうでしたか、わかりました。今までわかりませんでしたけれども、今よくわかりました」

といつて、差し出されたプレゼントを「ありがとうございます」と言っ受けてとっている。それを第三者が見たら、

「あつ、あの人は信仰がある」

という。本人は「信仰」をもっていない。プレゼントを「ありがとうございます」と受けとっているだけです。そういうふうに本当に単純率直にということ。だから、

「幼な子のようにならなければ」

とキリストが言われましたものね。幼な子というのは疑われないもの。お母さんに抱っこされて、おっぱい飲んでスヤスヤ眠っている。お母さんが手を離したら地面へ落っこちたらアウトですからね。そんなことをつゆ疑われないで、本当に抱かれているというこの姿。

だから、イエス・キリストは私たちをそういう幼な子に、神・キリストの幼な子にしてください。幼な子は「ありがとう」といって生命をいただいて、そして成長していく。

今度は、我々には使命があります。そういう神・キリストの側でやってください。

「こんな素晴らしいことをしてください。知ってちょうだいね」

と。私自身がそういう事態を「ありがとうございます」と受けとって、自分自身が変わってきたんです。

「夢も希望もないわ」

なんていうことをもう言わなくなった。天国人になってしまった。

「そのことをあなた方も知ってほしい」

と、そういうふうには私は思います。

●「あなたは何人にキリストを伝えましたか？」と天国で訊かれる

いつかもしましたね。皆さんが天国に行かれた時、

「あなたは何人の人にキリストを伝えましたか。何人の人を救い上げるように働きましたか？」

「いや、実は一人もなくて……」

そんなことを恥ずかしくて言えない。

「あなたはどこの集会の人？」



「京都キリスト召団です」

「指導者はだれ？」

「奥田昌道です」

「あいつはバカだね」

なんて、私にそんな恥をかかさんでください、皆さん。

大学でも「聖書研究会」というのがいくつかありました。私はそんな「研究」なんて恐れおおい。「聖書を読む会」という。聖書を読めば聖書が私を捕まえてくれる。御言が私を捕まえてくれる。そうやって、

「一緒に読もうね」

と言って研究なんかしない。そんなことを、京大に籍を置いていた時もやってきましたけれども。要するに、神・キリストの側でどういことを私たちのためにしてくださっているかということを、それを知っていただくということですね。

5月3日の講筵メモには、

「神の愛は主イエス・キリストの十字架における絶対愛において表れている。その愛を受けとるか受けとらないかは各人の自由であるが、それを有難く受けとることを信仰とよぶ。信仰によって義とされるとはこのことをいう。」

それから5月17日の筵題は、

「恵信一如」の「信」に生きる」——エペソ書第2章8節——

「恵みにより信仰により」

という言葉が出てくる。

今日5月24日の筵題は

「愛」——ヨハネ第一の書 第1～3章——

「愛」という。ヨハネ第一の書ということにいたしました。では、ヨハネ第一の書に入ります。口語訳はわかりやすいですから、文語訳が苦手な方はどうぞ口語訳で充分ですから、それをしっかりと読んでください。文語が苦手の方は口語で充分ですから、口語訳聖書でお読みくださればいいと思います。

重点は3章になりますけれども、前からざっと見ていこうと思います。皆さん、聖書を本当に愛読してくださいね。「教訓の書」なんて思わないで、

「聖書は生命のパンである」

と、そういうつもりで食べていただきたいんです。

●ヨハネの第一の手紙第1章

第1章からざっと読んでいきます。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見



て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について

イエス・キリストのことをヨハネはこんな言い方をしている。

——²このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである——³すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。

ヨハネはキリストべつたりですから、そういう中に抱き抱かれる関係にあつたわけですよ。

「私たちがそんなふうにイエス・キリストさまとワンセットであつたように、あなた方もそうあつて欲しいという願いを込めて、あなた方に伝えたいことはそういうことだ」と。

⁴これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。

クリスチャンの喜びは自分がそういう信仰の中に導かれて、ありがたいと思うのと等しく、他人に伝えてそれを受けとられて、同じ喜びの中に入ってくれたら、これはものすごくうれしんですね。そういうことで、ここにも、

⁴これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。

⁵わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であつて、神には少しの暗いところもない。⁶神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであつて、真理を行っていないのではない。⁷しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。⁸もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであつて、真理はわたしたちのうちにない。⁹もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。¹⁰もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであつて、神の言はわたしたちのうちにない。

ここは、「罪を犯す」とか、そういう言い方をしてますけれども、私から言うならば、神さまとワンセット、ちょうどイエス・キリストが、さっき言いました「主と僕」という義の関係と「父と子」という愛の関係が、「義と愛」がワンセットであつたように、「そういう姿であるということからズレているのがだめだ」という言い方なんです。



● 第2章

第2章にいきましよう。

「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。²彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。

ここでさかんに「罪」ということが出てきますけれども、これがまた問題ですよ。ついつい「罪」という言葉を聞かされたら、

「あんな悪いことをした。こんな悪い考えをいだいた」

とか、そういう何か自分の姿を思う。今度は逆に、そんなことは何もないという人は、
「私は罪なんか犯したことはないです」
となるし。何か自分の在り方が、

「あれをした、これをした、こんなことを言った」

と。それが神さまの目から見て、キリストの目から愛の——「神さまの目」というのは二つあります。「神と僕、主と僕」という義の関係。それから「父と子」という愛の関係。この二つがワンセットである姿。これが神さまの側で望んでおられる姿。それと相いれないものは全部、「罪」なんです。日本語で「罪を犯す」なんて言ったら、何か

「悪い事をする、悪い考えを抱く」

とか、そういう自分の何かに在り方を思うけれども。

「御意が私をおして成りますように。私はあなたに抱かれて愛の中にいます」

という、「義と愛」がワンセットで実現している姿、これが神さまが望みになっていて、そうでないものは全部ここで言っている「罪」という言葉にふさわしいのではないかと、私は思うんです。

³もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。⁴「彼を知っている」と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにある。⁵しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである。⁶「彼におる」

と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。

これは大変なことですよ。

「キリストと同じ姿で生きよ」

と言われている。では、キリストはどんな姿？ さつき言いましたね。「主と僕」という関係では、御意第一。それから「父と子」という関係では、抱き抱かれているという、「義と愛」



が本当にワンセットだった。

「そういう姿であれよ」

という。いや、それは我々はだめですわ。何で？ エゴイストだから。

⁷愛する者たちよ。わたしがあなたがたに書きおくるのは、新しい戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めである。その古い戒めとは、あなたがたがすでに聞いた御言である。⁸しかも、新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。⁹「光の中にいる」と言いながら、その兄弟を憎む者は、今なお、やみの中にいるのである。¹⁰兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまりくことはしない。¹¹兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである。

¹²子たちよ。あなたがたにこれを書きおくるのは、御名のゆえに、あなたがたの多くの罪がゆるされたからである。¹³父たちよ。あなたがたに書きおくるのは、あなたがたが、初めからいますかたを知ったからである。若者たちよ。あなたがたが、あなたがたに書きおくるのは、あなたがたが、悪しき者にうち勝ったからである。¹⁴子供たちよ。あなたがたに書きおくったのは、あなたがたが父を知ったからである。父たちよ。あなたがたに書きおくったのは、あなたがたが、初めからいますかたを知ったからである。若者たちよ。あなたがたに書きおくったのは、あなたがたが強い者であり、神の言があなたがたに宿り、そして、あなたがたが悪しき者にうち勝ったからである。¹⁵世と世にあるものとは、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにはない。¹⁶すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。

この「持ち物の誇」というのは、これは小池先生に言いたい。先生は、珍しい物があつたら、物凄く自慢されるんですよ。

「15世紀のルター聖書を古本屋で見つけて手に入れた」とか言つて、そういう、「持ち物の誇」といえるのかどうか知りませんけれども。

「こんな素晴らしい物をいただいたんだ」

と言つて、それが先生を励ますんですね。ま、そういうことがありましたけれども。全然、「金がたくさんあるから」なんて言われなかった(笑)。



●聖霊をいただいている

¹⁷世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる。

¹⁸子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて反キリストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてきた。それによって今が終りの時であることを知る。¹⁹彼らはわたしたちから出て行った。しかし、彼らはわたしたちに属する者ではなかったのである。もし属する者であったなら、わたしたちと一緒にとどまっていたであろう。しかし、出て行ったのは、元来、彼らがみなわたしたちに属さない者であることが、明らかにされるためである。²⁰しかし、あなたがたは聖なる者に油を注がれているので、あなたがたすべてが、そのことを知っている。

ここに「聖なる者に油を注がれている」とある。これは

「聖霊をいただいている」

ということを表している。これを物凄くここでは大事にされています。

²¹わたしが書きおくれたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、それを知っているからであり、また、すべての偽りは真理から出るものではないことを、知っているからである。²²イエスのキリストであることを否定する者ではないか。

これは大事なことです。「偽り者とはだれであるか」と。「うそつき」ということは、宗教的な意味では、

「キリストを否定する」

ということだと言う。今でこそ、

「イエスという方は神の子である」

ということが定着していますけれども、その頃は、昔はいろんな偽キリストがいっぱい出てきたり、いろんなことをやりますから、たとえ奇蹟のわざをなさっても、

「あれはサタンによつてあんなことをやつて、人を惹きつけようとしているだけだ」

とか、そうやって本当にイエスが神の子であつて、御意を貫いていることをなかなか認めなかった。パリサイ人^{パリサイ人}というのはむしろ

「自分たちが信仰している律法を守っているか」

という、そっちの角度なんです。キリストは

「お前たちは律法を守りながら、愛がないではないか」

と、そう言つてキリストは愛を大事にされた。それに対して、彼らは誠律を、

「安息日には何もしはならない」

とか言う。イエスは安息日に人をどんどん癒されている。そういうように、表向きは形式的には律法を守っておられないようでありながら、



「御意は人を活かすということ、人に生命を与えるということ。安息日とは、人のわざを休めて、休んで御意を、愛をしつかり受けとることだ」

と。キリストはそれをなさったわけです。ところが、彼らは

「何もしてはならない」

と、そればかりを言う。そういうふう非常に形式的にしか受けとらない。彼ら律法学者に対して、イエスの方は本当に

「神の御意は愛である。愛は人を活かすことである、生命を与えることである」と。そういうことを仰いましたよね。

父と御子とを否定する者は、反キリストである。²³御子を否定する者は父を持たず、御子を告白する者は、また父をも持つのである。²⁴初めから聞いたことが、あなたがたのうちに、とどまるようにしなさい。初めから聞いたことが、あなたがたのうちにとどまっておれば、あなたがたも御子と父のうちに、とどまることになる。²⁵これが、彼自らわたしたちに約束された約束であって、すなわち、永遠のいのちである。²⁶わたしは、あなたがたを惑わす者たちについて、これらのことを書きおくった。²⁷あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい。

これは非常に大事なことです。当時は、「律法を守る」とか非常に外側的なことでした。キリストはもつとそれに反対されました。彼らは見せびらかすようにして、施しをやる時には、鐘をならして

「さあ今から施しをするから見ておれ」

とか、街角に立って、わざわざ大声でお祈りをするとか。要するに、人に見せびらかせて、「自分はいらないことをやってます」

とやる。それに対してキリストは、

「隠れた所に、自分の部屋にこもって、隠れたことを見ておらる隠れた父に祈りなさい」

という、逆なことを仰ったでしょ。そういうことをここで思うんです。

²⁸そこで、子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、彼が現れる時に、確信を持ち、その来臨に際して、みまえに恥じることがないためである。²⁹彼の義なるかたであることがわかれば、義を行う者はみな彼から生れたものであることを、知るであらう。



● 第3章

次の第3章が非常に大事なところです。

¹わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。²愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。³彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。⁴すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。⁵あなたがたが知っているとおりの、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。⁶すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である。⁷子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行う者は義人である。⁸罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。⁹すべて神から生れた者は、罪を犯さない。神の種が、これは聖霊のことです。

その人のうちにとどまっているからである。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができない。¹⁰神の子と悪魔の子との区別は、これによつて明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。¹¹わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。これは大事ですね。今日のタイトルは「愛」と題しましたが、非常にこのヨハネ第一の手紙はこの「愛」ということを強調しています。

¹²カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。

これは旧約聖書の創世記の所をまた見ていただければいい。

¹³兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及ばない。

この「世」というのは、つまり神・キリストに敵対するような、そういう精神風土が漲っているような世界のことを言っている。

¹⁴わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からのちへ移ってきたことを、知っている。愛さない者は、死のうちにとどまっている。¹⁵あなたがたが知



っているとおり、すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない。

●他者のために生命をすてる愛

次は凄いですよ。

16 主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。

ここですね。この3章の16節です。ヨハネ伝の3章16節も、

「それ神は独子を賜ったほどに世を愛してくださいました。信ずる者が一人も滅びないで永遠の生命を得るためである」(ヨハネ3・16)

と、これがヨハネ伝の3章16節です。こっちのお手紙の方は3章16節が——不思議なんですけれども——ここに

16 主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。

とある。普通、世間一般には、愛というのは恋愛愛的な、そういう抱き抱かれのような関係。それはそれでいいんですけれども、ここで言っているのは、

「他者のために生命をすてる、これが愛だ」^{ひとりじ}

という。神さまは、自分が愛する独子であるキリストを、我々を救い上げるために犠牲にして献げてくださった。

「神は愛なり」

というのはそういうことで、感情的に愛するというものではない。イエス・キリストという孝行息子を犠牲にしてまで、私たちを本当に神の子にする道を開いてくださった。そこなんです。それがここに書いてある。

16 主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。

いや、そう簡単に捨ててもらっては困りますよ。そういう気持ちで自己犠牲を厭わ^{いと}ない。

「他者のためなら本当に自分を捨ててかかって、人を救いあげる」

という意味の自己犠牲を厭わないという、これがイエスが我々を救い上げるために、

「十字架の犠牲を払ってくださいました。その気持ちで、他者のために尽くしなさい」ということです。ここに具体的なことが書いてあります。

17 世の富を持つていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるか。18 子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合お



うではないか。¹⁹それによつて、わたしたちが真理から出たものであることがわかる。そして、神のみまえに心を安んじていよう。²⁰なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあつても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであつて、すべてを²¹ご存じだからである。

たとえ自分は神さまに対して、

「どうもあまり御意にかなうようなことをしてこなかった」

といつて責められるようなことがあつたとしても、

「神さまの側はお前を赦してくださるよ、大丈夫だよ」

と励ましてくれている。

●互いをキリストの心で愛し合う

²⁰なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあつても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであつて、すべてを²¹ご存じだからである。²¹愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。²²そして、願ひ求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。²³その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。

お互いを本当にキリストの心で愛し合う。それが御意にかなうことだと。そういう兄弟愛ということを強調しているんです、このヨハネの手紙は。

「何か立派なことをやれ、何か派手なことをやれ」

とか全然言つてない。互いに愛し合う、互いに赦し合う。これは私はコリント前書13章の愛の姿と共通だと思う。

「⁴愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、」(コリント前13・4)

という、あのコリント前書13章の愛の姿。

「¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」(コリント前13・13)

と。それから更にいえば、ローマ書の8章。新約聖書の主題は「愛」といつていいわけです。そして、キリストがお手本であられるわけですよ。しかも、我々をそういう愛の人に創り変えようという、それがキリストの我々に対する導きです。だから、新約聖書全体が「愛」というもので貫かれていると思います。そういう「愛」に関する所をずっと拾いあげていかれたらよろしいかと思えますけれども。



しかも、私は最初の頃は恐かったんですよ。

「裁かれるのではないか。本当に御意にかなうような生活をしているのだろうか？」

と、物凄くこわかった。ところが、いつの間にか恐なくなかった。

「お前がどんなやつであつても、お前を抱きしめて絶対捨てたまわない。それを信じなさい」

という。それを言ってくれたのは市川喜一兄でした。そこから何か安心感がただよってきたような思いがあります。つまり、それまでは、

「みんなで渡ればこわくない。人が皆やっているのだから」

と。ところが、キリストのところに来たら、それが通用しない。神さまの絶対的な基準で見られたら、全部アウト。表面的には御意に適っているようであつても、心の中ではそうではない。だから、アウト。すべてアウトになる。これは辛かったですね。そのときに、

「お前がどうであろうと、そんなことに関わりなく、お前を受け入れてくださる」

と。これは絶対愛という。「絶対」の「対」というのは相手でしょ。それに絶している。

「お前がどんな姿であろうと、キリストはお前を抱きしめておられる」

「そんなの本当にあるんですか？」

「十字架を見てごらん。キリストは何のために十字架にかかられたか。お前がどんなやつであろうと、天国人になるようにキリストはお前のエゴという、背きという、自己中心的な罪の存在であるお前を完全に無罪放免にしてください」

と。神さまの目から見たら、無罪放免が100%にいけるのはイエス・キリストしかいらつしやらない。その100%天国人であるイエスが、地獄往きを受けとってくださいました。何のためか？

「お前を天国人にするために」

「ああ、そうだったんですか。それはありがとうございます」

と。私にとって、「キリストを信ずる」というのはそういうことなんです。

「地獄必定の身であるのに、私を天国人にしてくださった、こんなありがたいことはありません」

と。親鸞がそうですよ。

「法然上人にすかされまいらせて……、地獄必定の身である私は、南無阿彌陀仏を唱えるだけで、天国人にしていただける。こんなありがたいことはないじゃないか」
(たとへ法然上人にすかされまゐらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候ふ。……いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定のすみかぞかし)

ということを行っている。それと同じことが、このヨハネの手紙ですよ。21節、

21 愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。

この、「心に責められるようなことがなければ」というのが、私は苦しかったです。ダメ



な自分だけ見てたら、責められることがいくらでも出てくる。キリストを知るまでは、
「みんなで渡ればこわくない」
で、世間が標準ですから、

「いや、我々のはまだましや」

ぐらいですむ。ところが、イエス・キリストという新しいスタンダードが出てくれば、もうとてもではない、どうしようもない。本当に辛かった。そこを突き抜けさせていただいた。

●聖霊という霊を下さる

それは何か。絶対愛です。つまり、相手を絶している。相手がどんな姿であろうと、変わらない愛を貫いてくださったのが、キリストの十字架だった。

「十字架はご自分のためではなかった。私たちを天国人に、本当に神の子にするための唯一の手段が十字架だった。ありがとうございました」

と。そういう単純な率直なこと。今度はそれだけではない。

「お前を天国人として私の僕^{しもべ}として用いる。この愛なき世界に愛をもたらす。生命なき世界に生命をもたらす。それをお前にもやってもらいたい」

と。キリスト一人ではなかなか、地球の人間が多すぎて、どうにもならんと。だから、

「お前は、今度は小さいキリストになって、人々を救い上げて行つてほしい」

「はい、ありがとうございます」

と。聖霊という霊を下さる。そして、

「汝ら、我を選びしにあらず。われ汝を選びたり。行きて実を結び、その実が豊かに稔るためである。それは兄弟姉妹が互いに愛し合うためである」

と。ヨハネ伝14章とか15章に出てきていますように。だから、ヨハネの手紙とヨハネ伝は本当に、やはり同じ著者によるものですから、当然なんですけれども。そういうふうに、一方ではヨハネ伝、他方ではヨハネの手紙、これをワンセットにして、皆さんはまた愛読してくださいね。もう、時間が経きましたので、最後のところへ行きます。

²¹愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。²²そして、願ひ求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、

「神の戒め」はキリストをとおして我々に示してくださっている戒め。これは愛ですね。

みこころにかなうことを、行っているからである。²³その戒めというのは、

神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。

これです。「あれもせよ、これもせよ」ではない。イエスが私たちを愛してくださったように、今度は、私たちがお互いに愛し合う。この「お互い」というのはクリスチャンだけです。



そうでない人に対しても、キリストの愛をもつて接して、その人たちをキリストのものとすると、伝道ということです。

²³その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。²⁴神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。

ヨハネ伝の14章、15章で御霊のことが出てきます。

「^{たすけぬし}助主をあなた方に送る。この助主はあなた方にすべてのことを教える」

と。ですから、ヨハネ伝の14章から16章のあたりと、それからこのヨハネの第一の手紙の2～3章のところはワンセットです。

今は読み物も世間にあふれていますけれども、本当に読んで血となし肉となしていくのは、やはり新約聖書です。それから、旧約ではイザヤ書とかいくつかの書があります。そういうものを皆さんが本当に愛読されて、ご自分の身に体されて、今度はそれをまた人々に伝えるということも大事な役目です。今はもう、本といい、あふれていますからね。そういういろいろそういったものが溢れているなかで、

「本当にこれが生命の書ですよ。これによって生命を得る。この地上だけの生命ではない。天上の生命なんですよ」

と。そして、人々を本当の愛の世界へと導いていく、そういう役割をあなた方は神さまからいただいております。我々の地上での生活がちょうど、

「御意が天において成っているように、地においても成りますように」

という、あの「主の祈り」を、今度は私たち自身が主の僕として、キリストのいわば子分として成就していくように。これがクリスチャンたちに託された役割ですね。学者であろうが、スポーツマンであろうが、何であろうが、地上でやっている営みは様々です。けれども、常に角度は

「御意が天において成っていますように、地においてもこの私をとおして成りますように」

ということ。

スポーツ選手の、例えば大谷選手なんてのはやはり素晴らしいと思いますね。どれだけの人を励ましているか。^{あこが}憧れをもたらしめているか。だから、大谷がまた

「キリストは素晴らしい」

と言い出したらもつと凄いいけれども、今度は逆にみなは拒絶するかも知れないけれども。私心なく人々を喜ばせたい、人を励ましたい、そういう気持ちでベストを尽くしている選手たちは、私は素晴らしいと思っています。はい、それではこれで終ることにいたします。
(讃美355番「主を仰ぎみれば」)

